

## モテットBWV226の歌詞についての一考察(1)

モテットとは簡単に言えばポリフォニー(多声音楽)による短い宗教合唱曲のことで、教会カンタータ(バッハは毎日曜日の礼拝のため約200曲の作品を残している)が作詞者の台本による華やかな器楽伴奏を伴う独唱曲やコーラル(讃美歌)から成るのに対し、モテットは主として聖書の聖句をもとにコーラルを組み合わせて作られ、器楽も通奏低音として補助的に用いられているにすぎない。主に葬儀や結婚式など教会外の行事のためのもので、バッハのモテット作品は6曲が真作と言われている。そのうちBWV230(Lobet den Herrn 主を讃えよ)とBWV227(Jesu, meine Freude イエスは私の喜び)はハルモニーコールでも既に歌っており、記憶に新しいところである。

モテット(独: Motette、英: Motet)の語源がフランス語の le mot(言葉)であると言われているように、モテットでは歌詞が特に重要であり、その理解が欠かせないところである。今回のBWV226(6曲あるモテットのバッハ作品番号BWVでは2番目なので「モテット2番」とも呼ばれる)では冒頭に出てくる Geist が主題である。この Geist はドイツ語の辞書を引くと男性名詞で「(物質・肉体に対するまたはある時代・事柄などの)精神、気風」「知力、理知」「(神によって吹き込まれる人間・動物の)生氣、活気」「霊、聖霊、幽霊」など多くの意味が与えられている。しかしモテット2番における Geist は聖句がBWV227(モテット3番)と同様に新約聖書「ローマの信徒への手紙(以下「ロマ書」と略す)」第8章から引用されているので「聖霊」であることは間違いない。

この「聖霊 der heilige Geist」という概念はクリスチャンでもその理解は中々難しいと言われている。要約すれば、万物の父であり唯一の存在である神(Gott)、その子であるキリスト(Jesus Christ)、父と子から出た聖霊(ラテン語では Spiritus Sanctus)の3つが一体となって神の活動を支えるという、言わばキリスト教の教義の根幹である「三位一体論(西暦325年のニカイア信条)」を形成するものであるが、これはこの間歌ったバッハのロ短調ミサ曲のクレド(信仰宣言)の内容そのものである。今回のハ短調ミサ曲はモーツァルトの未完の作品につきこの部分はかなり省略されている。

さてモテット2番の第1曲の冒頭の歌詞 Der Geist hilft unser Schwachheit auf は直訳すれば「霊は私達の弱さを助けあげる」となるが、最後の auf は一般に前置詞として使用(英語の on)されるが、ここでは aufhelfen と分離動詞の前綴りで helfen(hilft は現在単数形)を強める働きをしている。

次の denn は一般に理由を示す接続詞だが、ここでは「助けあげる」内容そのものを示すと考えられる。即ち直訳すれば「私達は知らない、何を祈るべきか、どう祈ればふさわしいものになるかを。霊自らが私達を代理して最良な状態にしてくれる、口では言えない溜め息とともに。」となる。

ここで特に解釈が難しいのはこの歌詞(ルター訳ドイツ語聖書)で使用されている vertreten(vertritt は現在単数形)である。この単語は辞書を引けば「代理する・代表する・支持する」という意味を持つ。ちなみに筆者所有のドイツ語統一訳聖書(Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift

1980)ではこの箇所は Der Geist selbst tritt jedoch für uns ein mit Seufzen, das wir nicht in Worte fassen können (直訳:しかし霊自身が私達のために味方をしてくれる、言葉に表せない溜め息とともに)となっており、ここでは vertreten の代わりに eintreten が使われている。この単語は「(中)入り込む」という一般用語であり、特殊な用例として für jn eintreten「(ある人の)味方をする、(を)弁護する、支援する」という意味がある。vertreten にしても eintreten にしても treten「歩む・踏む」という基幹語から派生した動詞である。

ところで日本の新共同訳(共同訳・統一訳とは同じキリスト教でも教義を異にするカトリックとプロテスタントの学者が協働して訳した聖書を言う)では「執り成す」という訳語がこれにあてられている。新約聖書の新共同訳は原典であるギリシャ語からのもので、ルターのドイツ語聖書そのものではない。原典がどのような言葉を使用しているかはギリシャ語が判らないので調べてないが、日本語の「執り成す」も解釈が中々難しい言葉である。岩波の「国語辞典」によれば「よいようにはからう、仲裁する・・・」とあり、新明解国語辞典では「不和・争い・叱責など激しく対立する双方の間に立ってその場の気まずい空気をうまくまとめる」と非常にユニークな注釈をしている。

橋爪大三郎という気鋭の社会学者は近著「教養としての聖書(光文社新書)」でロマ書のこの箇所を取り上げ、「執り成しとは神に向かって口添えをしてくれること」と簡明に定義している。また東京バロック・スクウェアの指揮者三澤洋史氏のモテット全曲演奏会のスピーチ原稿には「聖霊こそ、私たちの心の中に入り込み、私たちが内側から照らし、癒し、力づけ、私たちが神に従って行動する手助けをしてくれるもの」との記載がある。これからすれば、イエスが神と人間との仲介者(マタイ受難曲第29番に出てくる Mittler)であるのと同様に、聖霊は父である神とその子であるイエスと人間との間をつなぐ存在(執り成し役)と考えられているのであろう。「執り成す」といえば筆者はヨハネ受難曲の字幕の作成にあたり第9曲のソプラノのアリアに出てくる bitten の訳語に苦労したことを思い出す。普通は「お願いする」という意味だが、イエスに向かって「やめないでください、ご自身で私を引っ張り、後押しし、お願いすることを」では意味をなさず、散々当った結果辞書の最後に挙げられていた用例「(或る人のために)とりなす」から「とりなしてくださることを」と訳したものだ。

第1曲最後の歌詞 mit unaussprechlichem Seufzen も面白い言い回しである。新共同訳の「言葉に表せないうめきをもって」とは何だろうか。「うめき」は「溜め息・あえぎ」とも訳すことができ、勿論「苦しみ」を伴うことが第一義であろうが、何とも妖艶ななまめかしい言葉でもある。ドイツ語の語源辞典によれば Seufzen は「息を吸い込む時の擬音語」であり、Geist の原義は「興奮」である。この「うめき Seufzen」はロマ書第8章23節にも「被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり体の購われることを、個々の中でうめきながら待ち望んでいます。」と書かれており、これからみると「うめく」のは人間なのか「霊」自体なのか判断が難しい。いずれにせよバッハは Geist にしても Seufzen にしても16分音符や8分休符を多用してゆらぐようにあえぐように歌詞付けをしている。いわく言い難い「霊」や「うめき」そのものを表現するかのよう。

#### 【後記】

樂事を担当する一人として私の方は主にモテットの歌詞についての疑問点や解釈について考えたことを皆様にお伝えし、少しでもモテットを歌うときの参考になればと思っています。キリスト教の考え方やドイツ語の解釈など堅苦しいことが多いですが、お付き合い頂ければ幸いです。

山田 武(テノール)